

を残しているとも考えられるのである。

---

岡崎文明著

『プロクロスとトマス・アキナスにおける善と存在者

——西洋哲学史研究序説——』

晃洋書房, 1993年, xiii+482+16頁.

川 添 信 介

本書は著者岡崎氏の長年にわたるプロクロスを中心とした新プラトン主義研究とトマス・アキナス研究とを、以下に紹介する概念的枠組みによってまとめあげられたものである。ここには堅固な著者の「観方」が優れて一貫した仕方では提示されており、読者に強い印象を与える著作となっている。

さて、本書は短い「緒論」と「あとがき」を別にすれば、「第一部西洋哲学史観」、「第二部各論—プロクロス、『原因論』、トマス・アキナス、存在の優位性の哲学における悪の問題」それに「結論と展望」と続く構成となっている。本書の特徴の一つはこの「第一部」の存在であろう。ここで著者は自己の研究が単なるモノグラフィーにとどまるのではなく、西洋哲学史全体に一定の視座を設定した上でなされたものであることを表明される。「あとがき」によれば、「哲学は本来「全体」(totum)を探求する「学」である」から、「哲学史の〈全体〉をいかにとらえ理解すればよいか」ということが氏の積年の課題であった。また、課題であるだけでなく、研究の途上にある場合にも、哲学史全体の理解が「探求者の進む方向と目的を絶えず指し示し導いてくれる「灯台」でもある」とされている (p. 478)。だから「結論と展望」において、クザーヌスへの新プラトン主義の影響の問題にまで言及して筆を置いておられる。このような氏の指摘は哲学史の研究者にとっては、当然のこととは言え、つい目前の研究課題に目をふさがれてしまいがちな評者にとっては強烈な警鐘であった。

では、氏が「第一部」で採用する「灯台」であり、「第二部」の各論がそこで展開される「共通の座標空間」(緒論, p. 2)である視座はどのようなものであるのか。それはジルソンの西洋哲学史観である。西洋哲学史の切れ目をギリシア哲学と中世哲学の間に置き、ヘーゲルやヴィンデルバントと違って中世哲学に独自の意味を認める

史観である。より内実に即して氏の引用するジルソン自身の言葉によれば、「ギリシア思想が理解したような善の優位性は、存在を善の下に置くことを強いる。しかるに『出エジプト記』の影響下でキリスト教が理解したような存在の優位性の思想は、善を存在の下に置くことを強いる」(p. 85) という区別によって、「万有の根源」、「第一原因」のとらえ方が中世から根本的に変わったのだ、ということになろう。このような〈善の優位性の思想〉から〈存在の優位性の思想〉への転換の次第を、「古代哲学最後の光輝」たるプロクロスと「スコラ哲学の王者」たるトマスを比較検討することを通じて確認し吟味しようとしたのが本書の骨格であると言える(『原因論』の部分はテキストそのものの解釈の困難さもあってか、全体としてはトマスによる解釈にほぼ依拠したものである)。

そしてこのような課題を論じるために著者は「テキスト」への密着という方法を取る。この方法は見事なまでに徹底されている。例えば『神学綱要』の一命題について、まず訳出したテキスト全体が提示され、それがいくつかの推論の段階に分析され、さらにその各段階について議論の中身が整理され、最後にそれまでの分析が再度「まとめ」として提示される、といった手続きが踏まれる。これが『神学綱要』(命題 20 までの主たる命題) について、またトマスの著作についても繰り返される。当該の著作に親しんでいる読者にとっては多少煩瑣すぎる面はあるであろうが、プロクロスの著作に親しんでいない評者などには有益なものであった。

さて評者は新プラトン主義、とりわけプロクロスについて論評を加えるだけの知識を持っていないので、トマスへの新プラトン主義の影響という点を中心として、以下多少の疑問を呈することで書評の任を果たすこととしたい。プロクロスにおいて〈善一者が存在に対して優位性を持つ〉ことは、確かにテキスト上はその通りであろう。しかしその〈存在〉はトマスにおいて〈善より優位である〉とされる〈存在〉と同じ意味であるのか。この問題は岡崎氏も折に触れて言及しておられる(例えば、p. 86, p. 435)。例えば、新プラトン主義における善の〈優位〉とは段階(タクシス)を異にする〈超越〉であるのに対して、トマスにおける存在の〈優位〉とは同次元にありつつ〈観念(ラチオ)において先〉であること(ens と bonum 置換可能性)が確認されている(p. 184, 第 3 章第 3 節)。だとすれば、二つの〈優位性〉を並列して論じることそのものに対して反省的吟味が必要であると考えられるが、その点は十分になされているようには思われない。さらには、トマスにおいて被造物の有する存在と神

の有する存在とが同じ「存在」という語で呼ばれながらアナログ的關係にあることは氏も容認されるであろう。だとすれば、プロクロスにおいて「一者」と「存在」という別の語で指示されているもの間にも同様の関係がないのかどうかは探求に値するのではないか。自己の体系全体を前提としたうえで既存の用語に独自の意味やニュアンスを込めるのが卓越した哲学者の通例であろう。であるとすれば、とりわけ体系的哲学者と呼べるプロクロスやトマスについては、用語の上での表面的な対応関係に頼って論じることには、見取り図が極めて明快なだけに、かえって危うい面があると私は考える。

また評者に充分理解できなかったのは、第一原因における目的因と作出因との関係の議論である（第3章第4節）。本書のこの部分は岡崎氏が第41回中世哲学会大会において発表されたものであり、水田英実氏がコメントでこの見取り図に疑義を呈しておられる（『中世思想研究』XXXV, pp. 140-45）。水田氏の指摘された点とも重なるが、本書全体との関連で問題にしたいのは次の点である。著者の主張によると、トマスは第一原因の原因性の観点ではアリストテレスの世界の永遠性を前提とした目的因優位の思想を排し、プロクロスの作出因優位の思想から哲学的な影響を受け創造論を形成したということになるであろう。ところが既に紹介したように、本書全体の論旨ではプロクロスはギリシア哲学の嫡子として善の優位の思想の「系譜」（アリストテレスも含まれる）に属しているのに対して、トマスに至る中世哲学は存在の優位の思想によってギリシア哲学の「系譜」からは切り離されるはずである。とするとトマスはプロクロスに代表される新プラトン主義（さらにはギリシア哲学全体）と「万有の根源」に関して、その根源の持つ「原因性」においては連続しているが、「善の優位」という性格においては決定的に断絶しているということになる。この〈ねじれ〉には問題はないのであろうか、岡崎氏はこの〈ねじれ〉はそのまま認めるべきであるという見方を採っているように思われる。第一原因・万有の根源が〈善一者〉でありつつ第一の〈作出因〉であり、目的因よりも作出因が優位にあることには問題がないのだということになる（第1章第3節4）。だからこの場合、トマスは新プラトン主義から万有の根源に対する〈善という名前〉を第一義的なものとしては受け取らなかったが、思想の実質においてはその全体を受け入れていたことになるのではないか。そうすると逆に、プロクロス自身の哲学の解釈に関しては、本来第一の〈作出因〉として〈存在〉を産み出す根源が決して〈存在〉とは呼ばれずに〈善〉と呼ばれなければな

らなかったのは何故なのかという、前述したと同種の問題を考えてみなければならぬことになる。私の読み違えでなければ、この点の論究は充分でないように見える。

もちろん氏は新プラトン主義における第一の作出因とトマスにおけるそれとが大きく異なった点を持つことを見逃してはいない。つまり、トマスにおいては万有の根源が〈存在〉であると同時に〈知性〉であり、従ってさらには〈意志〉でもあるのに対して、新プラトン主義ではそうではないことは随所で指摘されている。ただし、本書ではこの点は指摘にとどまり、その論究は課題として残されている。だが、万有の根源において優位なのは作出因の性格か目的因の性格かという相違（これが些細なものではないが）よりも、それが〈意志的に作出するのか、必然的に作出するのか〉という相違のほうが、西洋哲学史の分節のものさしとしてはより決定的であるように私には思われる。少なくとも、トマスが自己の哲学と新プラトン主義の哲学との決定的な相違をどちらに置くかと問われれば、そう答えるのではないであろうか。この課題として残された論点についても岡崎氏のお立場をうかがいたいという感を深くした。

以上、ない物ねだりになってしまったものまで含めてコメントを記してきたが、本書が新プラトン主義の原典を中世との関係において読み直し格闘した貴重な労作であることは間違いがない。トマスの理解のためにも、さらには西洋哲学史全体の理解のためにも、この分野でのさらなる研究が必要であり、本書がその土台となる研究であることは疑いえないと思われる。最後に氏が大いに依拠しておられるジルソンの言葉を引用して、本書に対する評者の印象をまとめることとしたい。

Aucune appellation ne désigne aucune doctrine de façon correcte, parce qu'aucune doctrine n'est exhaustivement analysable. Une doctrine ne porte correctement qu'un seul nom, celui de son auteur.

(É. Gilson, "Boèce de Dacie et la double vérité", *AHDLMA*, 1955. p. 94.)

---